

ナノ気泡 琵琶湖お掃除

県警への取材でわかった。県警米子署は8日、殺人容疑で泉容疑者を鳥取地検米子支部に送検した。

んの遺体は燃え方が激しかった台所で見つかった。解剖の結果、煙を吸った形跡がなく、死後、証拠隠滅のため火を付けたとみている。

ると、泉容疑者は元陸上自衛官で、3〜4年前に米子市に住む両親を介護するため、関西から単身で戻ったという。自衛官時代に教え

天空の

修復されることになった竹田城跡。兵庫県朝来市で昨年11月、本社へりから久保玲撮影

市に
ろから
態の石
り、50
表土が
雨水と

琵琶湖のヘドロをナノ（100万分の1ミ）単位の微細な気泡を生む装置で浄化する実証実験に、滋賀県の認定NPO法人・びわ湖トラストと立命館大などが取り組み、130日間約8万の分解効果を確認した。湖底には毎

【千葉紀和、写真も】

水中のバクテリア活性化

ヘドロを分解・浄化

立命大など

琵琶湖大橋の南側にある南湖では近年ヘドロがたまり、水質汚濁や地球温暖化につながるメタンガスが発生している。湖底の低酸素化が進み、バクテリアによる浄化が進まないことが一因とされ、同NPOなどが酸素を継続的に送り込む仕組みを研究してきた。

装置は機械開発ベンチ

ナノバブル発生装置（奥）で実験するびわ湖トラストの関係者ら。手前は太陽光発電で動く装置＝大津市の琵琶湖上で

ヤーの西研デバイズ（大阪市）などが開発、立命館大の今中忠行教授（環境バイオテクノロジー）らがヘドロ分解状況を分析した。空気や濃縮酸素を送り、特殊なセラミックスの細かい穴から気泡を噴出させる。発生した超微細気泡は、通常の気泡に比べ長時間水中に滞留しやすく、バクテリアを活性化させるという。

実験では、大津市の琵琶湖で湖底のヘドロを約2・2四方に仕切り、2012年3月〜昨年12月に装置の整備や改良をしながら効果を確認した。

魚獲量が激減している固有種セタシジミの再生や、湖魚を養殖するいくすの環境改善も期待される。同NPOの高木順理

事(67)は「太陽光発電で動く、移動型の浄化装置も実験しており、持続可能な水質改善事業のモデルを作りたい」と意気込む。

